

である。この試料もバブル型火山量比が30%を超えており、試料番号3と同様にK-Ahの降灰層準に近いと考えられている。上層黒ボクの試料番号4は火山ガラス量比がやや少なく、二次堆積ないし腐食を含む可能性が高い。

以上のことから、少なくとも加美町・中町といった多可郡内に存在する黒ボクはアカホヤ火山灰起源であることが判明した。ただし、純粋層は今回の試料では発見されなかった。また、黒ボクのうち、下層より上層の方が火山ガラス量比が少ないこと、周辺地質を反映した重鉱物組成を示していることから、下層は降灰層準に近いものの、上層は明らかに二次堆積ないし腐食を含むと判断できるようである。

一方、朝来郡山東町栗鹿遺跡黒ボク層で採取した試料においてもK-Ahの火山ガラスが認められた。ただし、その量比は少ないため、アカホヤ火山灰起源の黒ボク層である可能性は高いが、周辺地質を反映した重鉱物組成を示し、風化が進んだ粒子や摩耗した粒子が多く含まれていることから、上下層とも二次堆積と判断すべきであろう。ただし、但馬地域のうち、少なくとも南但馬に認められる黒ボク層がアカホヤ火山灰起源と判断できる材料を提示できたことの意義は大きいと思われる。このことによって、北播磨・丹波・但馬の一部地域ではあるが、広範囲に存在する黒ボク層がアカホヤ火山灰という1つの起源であることが判明した。今後はより詳細・広範囲に試料を収集・分析し、今回の判断がより深化したものになってゆくことを期待したい。

なお、アカホヤ火山灰は約6,300年前頃降灰しており、縄文時代草創期にあたる有舌尖頭器が黒ボク下層から出土していることと合致する。

第2節 北東播磨の弥生後期土器

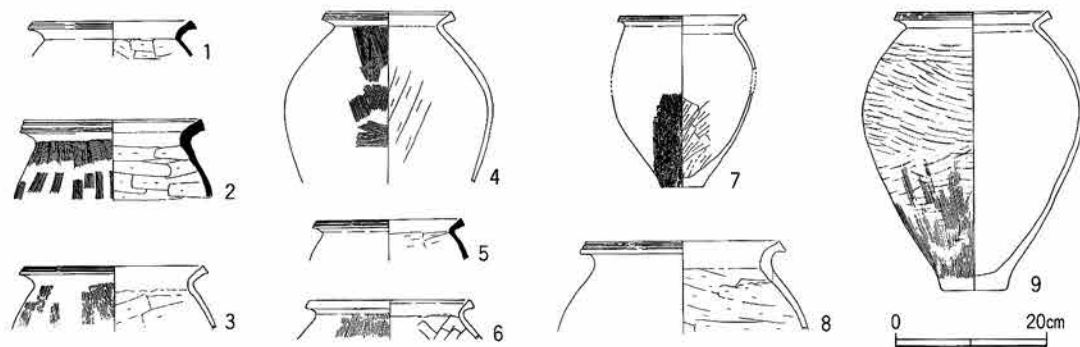
はじめに

荒田神社裏遺跡の今回の調査で出土した弥生土器は、その量は多くないが後期前半や庄内併行期の土器が認められた。これらの土器の位置付けを行うにあたっては、北播磨地域の弥生後期～古墳前期にかけての編年が必要であるが、現時点では未確立である。ただし、近年後期前半の細分案が提示されたが⁽⁵⁾、後期全体を細分するには至っていない。そこで、本遺跡出土土器の時期的位置付けと時期別の土器様相について述べるために細分案を提示する必要がある。ただし、今回の出土量が少ないため、周囲の遺跡の既往出土資料をもとに編年案を提示し、その説明の際に本遺跡も含めて述べることとする。

後期前半甕の類似性

弥生中期末～後期前半の土器は広範囲で類似した様相となっている。例えば、但馬地域朝来郡和田山町大盛山遺跡⁽⁶⁾出土の後期初頭の土器群は播磨や中部瀬戸内地域に類似していることが指摘されている。

そこで、第13図では兵庫県下で中期最終末～後期初頭に編年される土器のうち、甕を抽出してみた。左端の1～3は体部に比べて厚めの口縁部をもち、端面に擬凹線文を施す甕を示した。1は和田山町大盛山遺跡第1環濠出土甕、2は西播磨地域龍野市小神辻の堂遺跡⁽⁷⁾21溝出土甕、3は淡路地域洲本市大森谷遺跡Ⅲ地区包含層出土甕である。これら3点の甕は形態的に類似しているのみでなく、内面のヘラケズリの範囲、方向、単位まで類似し、外面の縦ハケといった調整方法まで酷似しているのである。4～6は口縁断面が三角形に近いものである。4は北播磨地域多可郡中町西安田長野遺跡群中の宮ヶ谷遺跡⁽⁸⁾住居跡KJ01出土、5は加西市長磯遺跡⁽¹⁰⁾建物址1出土、6は播磨南東部神戸市西区表山遺跡⁽¹¹⁾段状遺構出土甕である。これら3点も形態、調整が類似している。7～9は口縁端部を下方に少し拡張するものであ



第13図 弥生時代中期最終末～後期初頭の甕の類似

る。調整法などや細部の特徴にやや違いはあるが、類似例としてあげておく。7は丹波地域氷上郡青垣町ボラ山⁽¹²⁾7号墓出土甕、8は南播磨地域神戸市西区玉津田中遺跡C6-1トレンチの水路1出土甕、9は摂津地域高槻市芝谷遺跡住居S12出土甕である。形態的にはほぼ類似している。

以上のように、弥生時代後期初頭の土器、特に甕については兵庫県内に限ってみても但馬・播磨・淡路丹波といった広範囲において、細部まで非常に類似した土器となっていることが観察できる。したがって、編年案を示す際には比較的広い範囲を扱ってもよいようである。

なお、後期初頭土器のうち、播磨北東部に所在する遺跡は宮ヶ谷遺跡と長磯遺跡があるが、前者は中期末に編年されるため、播磨北東部で後期初頭に位置付けされるのは長磯遺跡出土土器になる。

北東播磨の設定

北東播磨の弥生後期土器編年案を組むにあたっては、多可郡・西脇市・加東郡から加西市域までの範囲で資料を集めた。また、後期前半において類似し、かつ比較的資料が多い、氷上郡・篠山市といった南西丹波地域の資料も同時に扱うこととする。

さて、先に述べたように、近年中町内における弥生後期前半の土器について二分する案が宮原氏によって出されている。ただし、中町内に資料を限ったため、後期Ⅰと後期Ⅱの土器が示すそれぞれの特徴のヒアタスが大きく、後期後半についても町内資料の制約があり、庄内併行期の土器も含まれている。この資料の制約の理由は後述するように、集落そのものの存在する場所の移動にも起因すると思われる。

編年の標識（甕・高杯）

さて、後期初頭～前半の土器のうち、甕についてはその特徴の変化が追いやすく、高杯についても同様のことが言える。甕については口縁端部に面をもち、体部最大径は中位までのもので、体部外面の調整は基本的にハケ、内面はヘラケズリを基本とする。口縁端部は拡張し擬凹線を施すものから端面が狭くなり、擬凹線を施さないものへと変化するようである。体部最大径は上部から中位へと変化する、後期後半には中位となる。後期初頭～前半の高杯は短く直立する杯部から直立した後外反するもの、そして屈曲部からすぐに外反するものへと変化する。杯部は概して大型である。脚部は中空から中実へといった大まかな変化が追える。

後期後半の甕は口縁端部を丸くおさめ、体部外面はタタキ、内面はハケ調整を基本とする。高杯は杯部口径が概して小型化し、屈曲部からすぐに外反する。脚部は中実である。庄内併行期の高杯杯部はさらに小型化し、有段高杯が出現する。庄内併行期には甕は平底から尖底となり、後半には体部内面がヘラケズリのものも出現する。庄内併行期の前半と後半で大きな変化が認められる。甕は庄内併行期前半にはかろうじて平底で、外面はタタキ、内面はハケないシイタナデであるが、庄内併行期後半には庄内

甕の技法が顕著に現れ、底部は尖底となる。後半にはそれまでの丹波・丹後系（北近畿系）の土器に加えて山陰系のものが出現するようになるようである。布留期には甕は球胴化する。典型的な初期の布留型口縁は存在しないようであるが、体部外面のハケや内面のヘラケズリなど布留式土器の特徴を示している。布留古相の前半まで、山陰系の土器が認められるようである。

後期前半末と後期後半初頭は甕の調整法による違いはあるものの、形態的にはあまり変わるところはない。さらに高杯の杯部をみる限り同時に存在していたとしても違和感がない。つまり、後期前半末と後期後半初頭は併行して同時存在していた可能性がある。この点については今後の課題としておきたい。ここでは、調整法の変化という型式学的視点での変化としてのみとらえておく。

以上が、甕と高杯からみた、北東播磨を中心とした弥生後期～古墳前期の土器変化であり、標識図化したのが第14～16図である。これらは、良好な一括資料と考えられるものを優先して抽出し、標識的に並べたものである。後期前半については比較的普遍的に出土している器種の、長頸壺・短頸壺も示した。また、理解を深めるためにも南西丹波地域の土器も並べている。以下、一括資料を中心に個別的に述べることにする。

後期初頭の一括資料

後期初頭1は加西市長磯遺跡建物址1柱穴2掘り方内出土の一括資料（1・2・21～24）である。甕（1・2）は口縁端部を上下に拡張し、凹線文ないし擬凹線文を端部に施す。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整である。南西丹波では氷上郡青垣町ボラ山墳墓群5号墓第1主体内の甕（3）がある。器高に対して胴径が大きく、体部最大径は上部にある。底部は突出しない大き目の平底である。壺には長磯遺跡資料で長頸壺・短頸壺がある。短頸壺（21～23）は口縁端部付近と頸部に多条の凹線文を施し、頸胴部の境に刺突文をめぐらせる。刺突文は長頸壺（24）にも認められるが、凹線文は施さない。体部内面はヘラケズリ調整である。

後期初頭2では多可郡中町鍛冶屋・下川遺跡竪穴住居跡2出土土器（4・5・25～27）があげられる。甕（4・5）の調整法は後期初頭1と同じであるが、口縁端部の拡張は少なくなり、体部最大径の位置はやや下がる。丹波では氷上郡山南町丸山古墳群下層出土の甕（6）がある。短頸壺（25～27）は口縁端部付近に凹線ないし擬凹線を施すものが多いが、条数が少なく、段状を呈するものも認められる。頸部付近の凹線文や刺突文は認められない。体部内面はヘラケズリ調整である。初頭2の高杯は鍛冶屋・下川遺跡竪穴住居跡1出土の（28・29）が当てはまる。杯上部はほぼ直立し短い。口径は概して大きい。

初頭3は中町安楽田・女夫岩遺跡竪穴住居跡出土資料（30～32）である。甕は認められないが、壺（30）内面はヘラケズリ調整、底部は突出しない大き目の平底である。高杯杯上部は初頭2に比べやや外傾して短い（31）と、直立した後短く外反する（32）がある。脚柱部は中空である。南西丹波ではボラ山7号墓出土資料（7・33）が当てはまる。甕（7）の胴部最大径はやや下がった位置にある。高杯（33）は安楽田・女夫岩遺跡（31）よりも外傾するが、脚部は筒状の柱部から外折して端部を拡張し、古相を呈する。以上、後期初頭の甕は体部最大径が上位にあり、底部は突出しない平底で、口縁端部は拡張し、凹線文・擬凹線文を施す。体部外面はハケ、内面は上部のみ横方向、その他は縦方向のヘラケズリである。南西丹波では上部のヘラケズリが斜め方向で、口縁端面の擬凹線が早い段階で消失している。高杯は口径が大きく、杯上部は直立し、概して短い。以上、後期初頭は宮原氏の後期Ⅰに相当する。

今回の荒田神社裏遺跡出土土器には確実に後期初頭と呼べるものはない。ただし、（91）の甕は擬凹線を施さず、体部内面上部が斜め方向のヘラケズリであることから、南西丹波の後期初頭の特徴を示し

た土器といえるかも知れない。

後期前半の一括資料

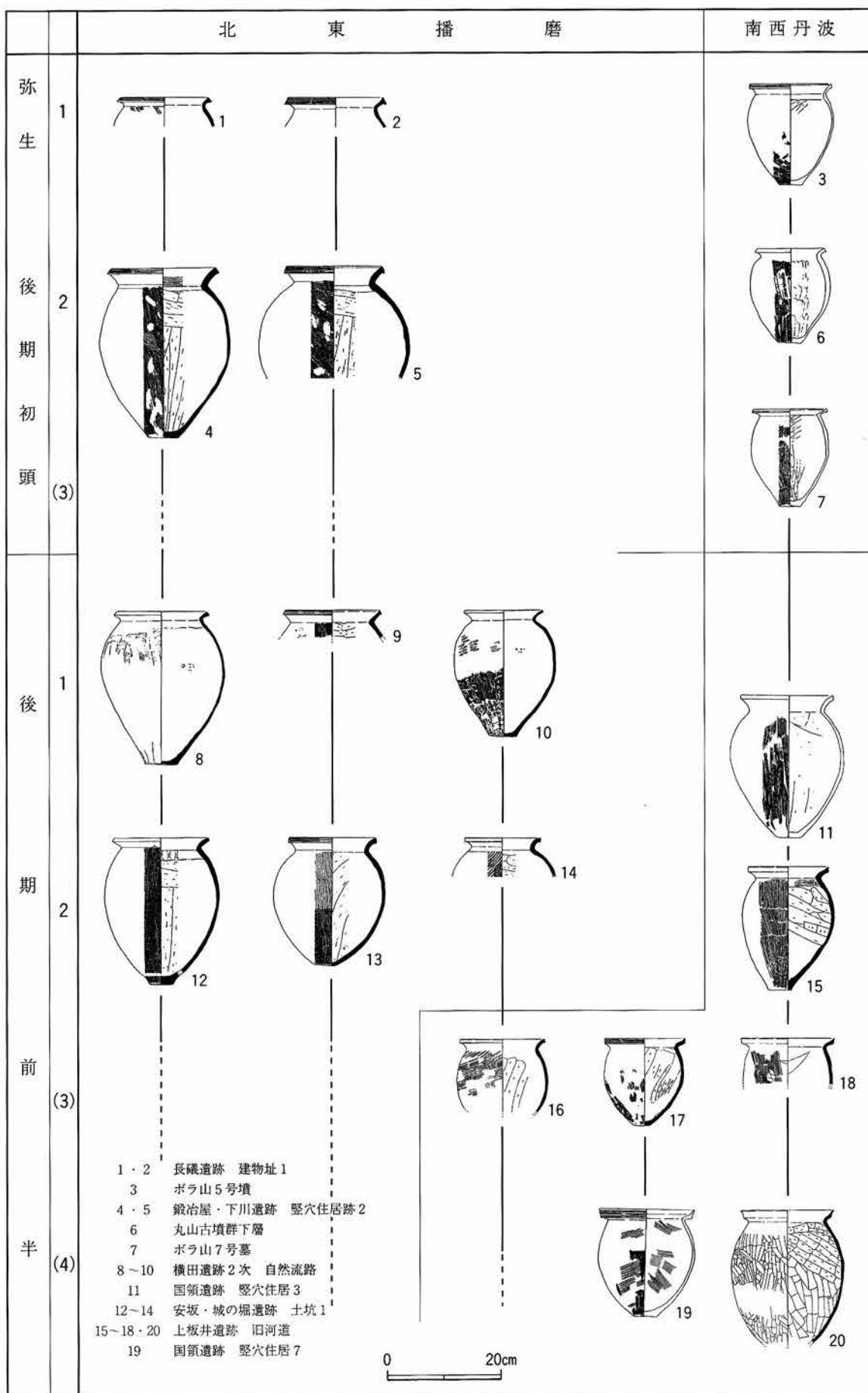
次に後期前半であるが、3ないし4段階が設定できる。後期前半1は加西市横田遺跡2次自然流路⁽¹⁸⁾出土土器中に認められる。出土土器は流路という遺構の性格上、時期幅があり、後期初頭や前半2の土器も含んでいるが、前半1に相当するもの(8・10・34・38)を抽出した。甕(8・10)は体部最大径が中位近くになり、体部外面タタキ調整後ハケを重ねるものが出現する。口縁端部に擬凹線を施す(9)が残るが、凹凸があまい。

南西丹波では純粋に前半1のものは見当たらないが、1～2に該当するものとして氷上郡春日町国領遺跡⁽¹⁹⁾竪穴住居3出土土器(11・45・46)があげられる。無文の甕口縁端部を上方に引き伸ばす(11)傾向が出現する。横田遺跡の短頸壺(34・35)は前代とほとんど変わらないが、長頸壺(36)は体部がより球形に近くなり、体部内面はハケ調整のようである。高杯(37・38)は杯上部の外反傾向が前代に比べてやや進む。南西丹波では国領遺跡竪穴住居2の高杯(39)が前半1と思われる。国領遺跡竪穴住居3出土高杯(45・46)は外反度がさらに増しており、1～2の時期である。

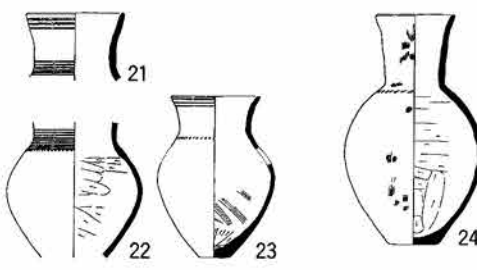
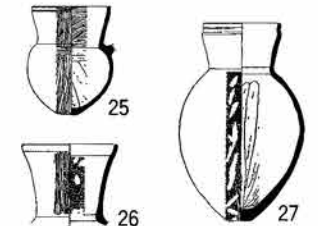
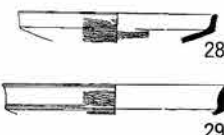
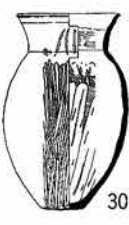
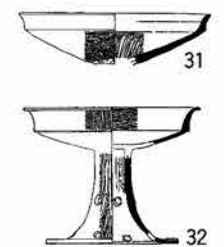
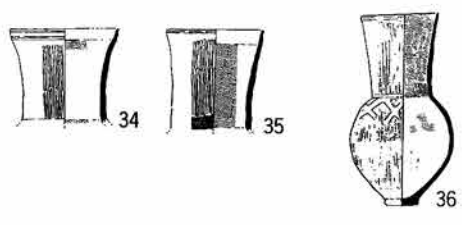
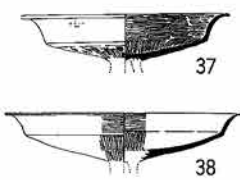
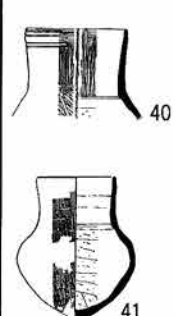
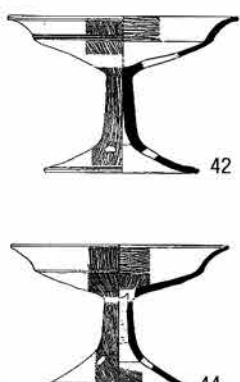
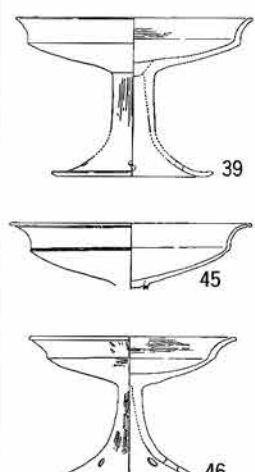
ところで、横田遺跡出土資料は甕の形態からすると、後期初頭でも違和感のないものである。しかし、高杯は明らかに安楽田・女夫岩遺跡よりも後出の形態である。ただし、後述する後期前半2の安坂・城の堀遺跡⁽²⁰⁾土坑1出土甕の特徴は近接した鍛冶屋・下川遺跡と直接つながるものであり、この2者を見ると、むしろ、横田遺跡の方が違和感がある。つまり、横田遺跡流路が鍛冶屋・下川遺跡と同時期で、土器に現れた形態的な差は地域差の現れである可能性も考えられ、鍛冶屋・下川遺跡の直後に安坂・城の堀遺跡が続くのかかもしれない。しかし、今回は型式学的な流れを重視しており、今後の検討課題として残しておくこととする。

後期前半2では中町安坂・城の堀遺跡土坑1出土土器(12～14・40～44)がある。甕底部は少し突出気味のもの(12)が現れ、体部調整は外面ハケ、内面ヘラケズリのままであるが、外面タタキ後ハケを重ねる(14)がある。口縁端部は面をもつが、拡張はされない。擬凹線の凹凸もあまくなる。南西丹波では上板井遺跡⁽²¹⁾旧河道③層出土甕(15)がある。内外面の調整は前代と変わらないが、底部はやや突出気味の平底で、口縁端部を上方に引き伸ばし、ナデ調整で終わっている。安坂・城の堀遺跡出土の高杯(42～44)は杯上部の外反度がさらに増し、杯底部に対する上部の幅が広くなり、脚柱部も中実や中実に近くなる。

北東播磨ではこの後後期後半までつながる資料が未発見であるが、南西丹波においては2段階程度認められる。上板井遺跡旧河道出土土器のうち、②層(16～18)と①層出土土器(20)に分けることとし、前者を前半(3)、後者を前半(4)と呼ぶ。前半(3)の②層出土土器のうち、甕は口縁端部を上方に拡張するがナデ仕上げの(18)、同様に拡張し擬凹線を施す(17)、口縁部はほとんど拡張せず体部はタタキ仕上げの(16)の3種が認められる。南西丹波ではこの時期からタタキ甕が出現するようである。前半(4)の上板井旧河道①層の甕(20)は、口縁部ナデ仕上げのものは上方への拡張が大きくなり、口縁部内面のいわゆる受け部が短くなる。擬凹線甕は上板井旧河道では良好な資料に恵まれなかったが、国領遺跡竪穴住居7出土資料がある。この甕(19)は形態的には前半(3)に近い様相を呈するが、体部の調整法が外面にタタキを残し、内面をハケ調整するという、それまでの調整法と違っていることから前半(4)に下げた。したがって、後半でもかまわないような様相である。また、後述するように、加東郡社町家原・堂ノ元遺跡⁽²²⁾溝2資料は高杯の杯上部が短く直立気味であることから、前半に位置付け



第14図 北東播磨・南西丹波の弥生後期前半までの土器変遷標識図（甕）

		北 東 播 磨	南 西 丹 波
弥 生 後 期 初 頭	1		
	2		
	3		
後 期 前 半	1		
	2		
	(3) (4)		
		21~24 長磯遺跡 建物址 1 25~27 鍛冶屋・下川遺跡 竪穴住居跡 2 28・29 鍛冶屋・下川遺跡 竪穴住居跡 1 30~32 安楽田・女夫岩遺跡 竪穴住居跡 33 ポラ山 7号墓 34~38 横田遺跡 2次 自然流路 39 国領遺跡 竪穴住居 2 40~44 安坂・城の堀遺跡 土坑 1 45・46 国領遺跡 竪穴住居 3 0 20cm	

第15図 北東播磨・南西丹波の弥生後期前半までの土器変遷標識図（壺・高杯）

るべきかもしれない。つまり、後期前半末と後半初頭が時間的に重複する可能性がある。しかし、ここでは後半に位置付けることとする。なお、後期前半はタタキを施す甕の出現および甕内面ヘラケズリの消失までを指標とする。

荒田神社裏遺跡出土土器では(61)の丹波・丹後系の甕が体部外面にタタキを有し、前半(4)の可能性はある。他に明確な土器は見当たらない。

後期後半の一括資料

後期後半の資料として、加東郡社町家原・堂ノ元遺跡溝出土土器(47~57・59~61)がある。溝2・3から出土している甕は、基本的に体部外面タタキ、内面はハケ調整である。また、社町下三草・諏訪ノ下遺跡⁽²³⁾の竪穴住居跡SB-04から出土している甕(58)も同様の調整である。それらの遺構から出土している甕を体部プロポーションと底部の形態から標識的に並べると、体部最大径が上位にあるものから中位への変化、底部はしだいに突出した平底への変化としてたどることができる。それらを4段階に分けたものが第16図である。後期後半1の甕資料(47)は家原・堂ノ元遺跡溝2、後半2(54)は同遺跡溝3、後半3(58)は下三草・諏訪ノ下遺跡SB-04、後半4(61)は家原・堂ノ元遺跡溝3といったそれぞれの遺構出土土器の中から各段階の例を示すことができる。また、後半1の溝2出土土器の中には体部外面タタキ、内面ハケ調整であるが、口縁端部が上方に伸びた丹波・丹後系甕があり、擬凹線文を施すもの(49)と施さないもの(48)が存在している。なお、後半2~4の丹波・丹後系甕は図示していないが確実に存在する。

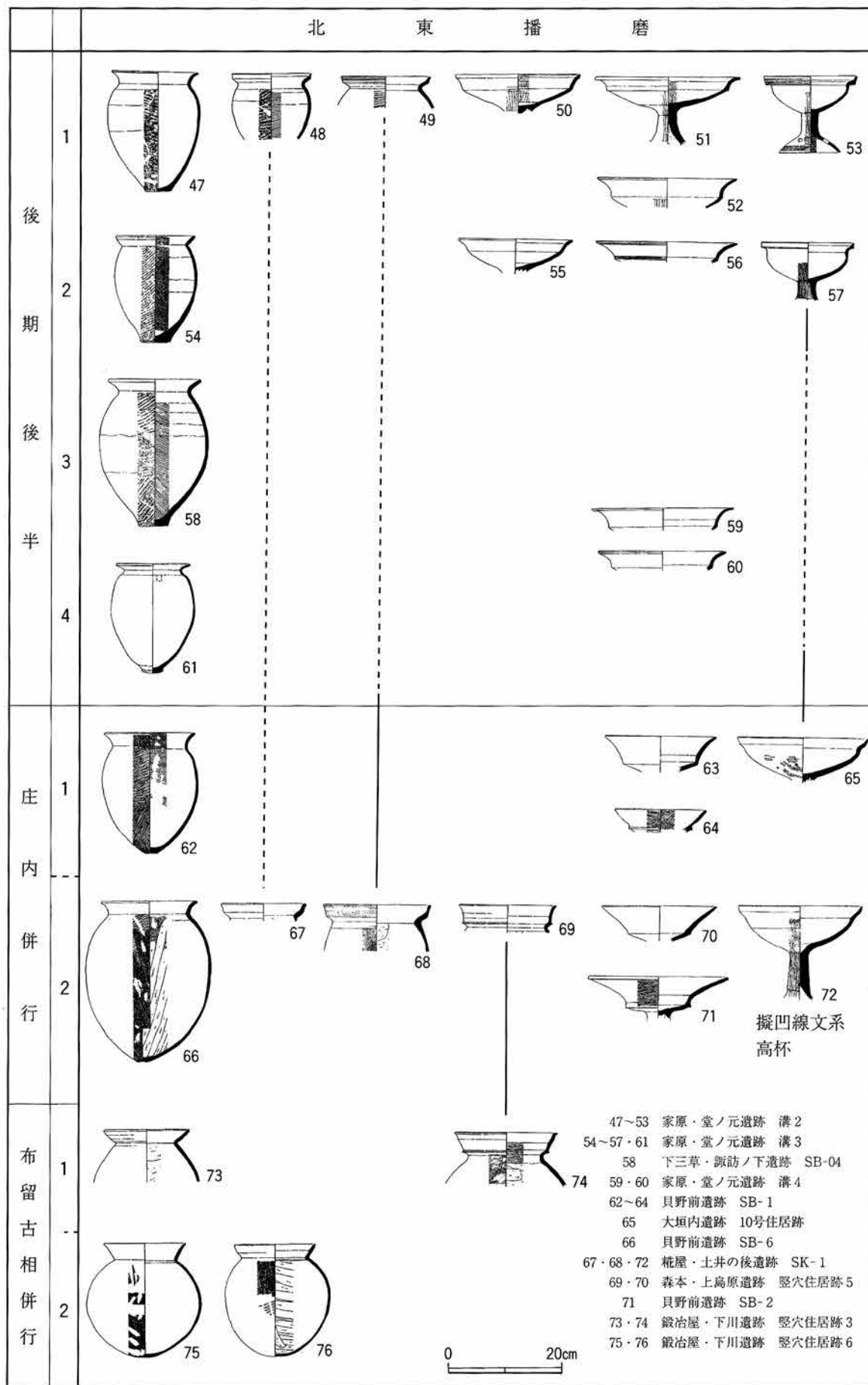
高杯では、家原・堂ノ元遺跡溝2資料(50~53)が後半1である。ただし、(50)や(51)は後期前半末に置く方がよいようにも思われるが、前述のように、時間的重複も含めて今後さらに検討してゆく必要がある。なお、家原・堂ノ元遺跡では丹波・丹後系の擬凹線文系高杯(53・57)が出土している。後半2の高杯(55・56)は後期前半に比べて口径が小さくなり、杯底部径と杯上部径の差が大きくなる。後半3~4では家原・堂ノ元遺跡溝4(59・60)以外に良好な資料が見つからない。

庄内併行期の一括資料

庄内併行期は2段階に分割する。前半は甕の製作技法に庄内型甕の影響をほとんど受けない時期、後半は形態・製作技法ともに庄内甕に大きく左右される時期である。具体的には、庄内併行1は中町貝野前遺跡⁽²⁴⁾竪穴住居跡SB-1出土土器(62~64)が当てはまる。甕(62)は体部最大径の位置が下がり、底部付近が丸くなり、尖底に近くなる。体部外面はタタキ、内面はハケ調整。高杯(63・64)は前代よりもさらに小型化し、杯上部が大きくなる。有段高杯の萌芽(64)が認められる。擬凹線は施文されないが、擬凹線文系高杯は西脇市大垣内遺跡⁽²⁵⁾10号住居跡出土の(65)がある。

荒田神社裏遺跡出土土器は多くの甕底部が小さな平底であり、(20)のように胴部最大径は下半にあり、内面はハケ、外面はタタキの上にハケを重ねている。また、(21)の口縁端部ははねあげ状を呈し、(33・35)は庄内型甕である。(39)の高杯は有段の傾向が現れており、(48)は貝野前遺跡SB-1出土土器に酷似例がある。(27)は中町思い出遺跡⁽²⁶⁾第2区SD-1出土土器に類似例がある。同遺構出土土器は庄内併行期の特徴を示すものが多い。以上のことから、本遺跡住居跡出土土器は庄内併行1の特徴を示し、遺構の時期も同様と思われる。また、柱穴および包含層出土土器も当該時期のものが大半と思われる。

庄内併行2の甕は貝野前遺跡竪穴住居跡SB-6出土土器(66)にあり、尖底で、体部は丸く、外面はタタキ後ハケ、内面はヘラケズリ調整である。丹波・丹後系甕は中町糺屋・土井の後遺跡⁽²⁷⁾SK-1出土の



第16図 北東播磨の弥生後期後半～古墳前期土器変遷標識図（甕・高杯）

(67・68)があり、口縁部に擬凹線を施すものとそうでないものがある。口縁部は薄く長く外上方にのびる。なお、この時期から山陰系甕が出現するようになる。中町森本・上島原遺跡⁽²⁸⁾堅穴住居跡5出土土器は庄内併行2であるが、その中に存在(69)する。また、同遺跡の高杯(70)は杯底部がさらに小さくなっている。貝野前遺跡の堅穴住居跡SB-2出土有段高杯(71)もこの時期であり、靴屋・土井の後遺跡SK-1出土の擬凹線文系高杯(72)もこの時期と思われる。

布留古相併行の一括資料

布留古相併行期の良好な一括資料は近隣では類例が少ない。鍛冶屋・下川遺跡堅穴住居跡3出土土器は布留型口縁が伴出しており、布留1～2の範疇におさまる。一方、はねあげ状口縁も存在することから、庄内に近い土器も認められる。ここでは布留古相併行1として位置付ける。甕(73)口縁端部は布留型直前のものが多く、体部外面ハケ、内面ヘラケズリである。山陰型甕(74)は外上方に開く口縁部で、端部に面をもつ。ほかに山陰系の鼓形器台が出土しているが、丹波・丹後系甕は認められない。布留古相併行2としたのは同遺跡堅穴住居跡6出土土器(75・76)である。甕体部は球形となり、内面は小さな単位のヘラケズリとなっている。なお、今回の位置付けは鍛冶屋・下川遺跡の報告書記述とは前後逆になっており、今回の判断を含めて今後の資料の増加を待って検討が必要と思われる。

土器様相の変化と集落位置

これまで北東播磨地域の弥生後期土器の変遷を甕・高杯に限って、具体的資料を扱いながら標識的に述べてきた。ここで注意したいのは他地域の影響を受けた土器の問題である。弥生後期初頭～前半の甕は内面全体をヘラケズリするという、中期後半までは体部下半のみ、中期最終末で散見されるようになった技法がある。この技法は吉備や讃岐・阿波といった中部瀬戸内沿岸系土器の動態と期を一にしており、凹線文の多用という面からも中部瀬戸内沿岸地域の影響を大きく受けているものである。むしろ中期末前後から一気に瀬戸内系の様相に変わったといっても過言でない状況である。このことは、垂下口縁高杯の突然の消滅と瀬戸内系高杯の出現という交代劇によっても説明できる。これらの現象は広範囲に認められ、また、「高地性集落」(標高が低かったり、比高差が小さくても、いわゆる「隠れ里」も含んだ広義の高地性集落⁽²⁹⁾)から出土する土器にその多くが認められることから、広義の「高地性集落」の出現と瀬戸内系土器様相とを結び付けて考える必要がある。ただし、「高地性集落」には中部瀬戸内沿岸系様相の強い土器を出す遺跡と、伝統的様相の強い土器を使用した遺跡の二者があるようである。

さて、後期前半まで中部瀬戸内沿岸の様相が強かった土器も、前半の末頃には畿内系のタタキ甕や丹波・丹後系の複合口縁甕が出現してくる。それと同時に、それまで集落が立地していた遺跡の大半が加美町・中町といった山間部であったものが、加東郡・加西市といった南部の山の少ない場所(以後、仮に山間部に対して平野部と呼ぶことにするが、低地のみならず段丘上や丘陵端にも遺跡は多く存在する)、平野部に多く認められるようになり、逆に山間部には極少となる。集落の移動があった可能性⁽³⁰⁾がある。平野部に多く集落が出現する頃にはタタキ甕がその主流を占め、内面調整もハケとなり、中部瀬戸内沿岸系要素はほとんどみられなくなる。一方、丹波・丹後系の甕・高杯は存続し、庄内併行期においても同様である。ただし、庄内併行2の段階で山陰系土器の流入が見られる。当地の人間が真似て作成した土器ではなく、明らかに山陰の人が作った土器であり、搬入品あるいは人の移動を物語るものである。この状況は布留古相併行に至っても続き、墳墓にも現れる⁽³¹⁾。同時に丹波・丹後系土器は認められなくなる。ただし、布留型甕は存在する。なお、集落の立地は庄内併行期に至ってようやく山間部にも出現するが、平野部でも存続するため、移動ではなく拡散の様相である。

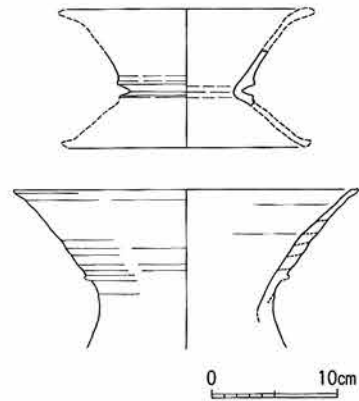
以上、土器と遺跡位置から北東播磨の弥生後期～古墳前期の状況を雑駁に述べた。大方の御叱正を賜れば幸いである。

註・参考文献

- (1) 田中眞吾・中島和一編『ひょうごの地形・地質・自然景観』神戸新聞総合出版センター 1998年
- (2) 野村亮太郎「加古川上流部、篠山盆地における河川争奪現象」『地理学評論』57 1984年
- (3) 山口卓也ほか『板井ヶ谷遺跡 ― 旧石器時代の調査 ―』兵庫県文化財調査報告第96-1冊 兵庫県教育委員会 1991年
- (4) 中町教育委員会宮原文隆氏、京都府立大学助教授菱田哲郎氏の御了解を戴いた。
- (5) 宮原文隆「中町内における弥生時代後期前半の土器群」『安坂・城の堀遺跡Ⅱ ― 県道山南中線建設にかかる文化財発掘調査（第4区B・第6・7区）―』中町文化財報告23 中町教育委員会 2000年
- (6) 田畑 基・中島雄二『大盛山遺跡』和田山町文化財調査報告書第7集 和田山町教育委員会 1995年
- (7) 岸本道昭『小神辻の堂遺跡 ― 仮称揖龍農業協同組合営農センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』龍野市文化財調査報告20 龍野市教育委員会 1998年
- (8) 別府洋二・平田博幸・市橋重喜『大森谷遺跡 ― 淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―』兵庫県文化財調査報告第27冊 兵庫県教育委員会 1985年
- (9) 山中 進編『西安田長野遺跡群調査報告(Ⅱ) 宮ヶ谷遺跡・長坂谷遺跡・円満寺東の谷遺跡（関連遺構）・西安田遺跡』中町文化財報告18-2 西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会 2000年
- (10) 吉識雅仁編『長磯遺跡 ― 万願寺川災害復旧助成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県文化財調査報告書第85冊 兵庫県教育委員会 1991年
- (11) 深江英憲ほか編『表山遺跡・池ノ内群集墳 ― 神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―』兵庫県文化財調査報告第202冊 兵庫県教育委員会 2000年
- (12) 徳原多喜雄・植野浩三編『ブラ山・ボラ山 ― 青垣工業団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』永上郡埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 青垣町・永上郡教育委員会 1995年
- (13) 山本三郎編『玉津田中遺跡調査概報Ⅰ ― 昭和57・58年度確認調査概報―』兵庫県教育委員会 1984年
- (14) 宮崎康雄編『古曽部・芝谷遺跡 ― 高地性集落遺跡の調査―』高槻市文化財調査報告書第20冊 高槻市教育委員会 1996年
- (15) 宮原文隆編『鍛冶屋・下川遺跡 ― 中町鍛冶屋線代替道路建設に伴う文化財発掘調査―』中町文化財報告6 中町教育委員会 1994年
- (16) 櫃本誠一・瀬戸谷皓『日本の古代遺跡2 兵庫北部』保育社 1982年
- (17) 宮原文隆編『安楽田・女夫岩遺跡』中町文化財報告4 中町教育委員会 1993年
- (18) 横田遺跡第2次調査自然流路。図の公表にあたっては、加西市教育委員会の森 幸三氏に御了解を頂いた。
- (19) 吉識雅仁・村上泰樹ほか『国領遺跡(Ⅱ)(川畑・蓮町Ⅲ地区の調査) ― 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告XXI―』兵庫県文化財調査報告 第122冊 兵庫県教育委員会 1993年
- (20) 宮原文隆『安坂・城の堀遺跡Ⅱ ― 県道山南中線建設にかかる文化財発掘調査（第4区B・第6・7区）―』中町文化財報告23 中町教育委員会 2000年
- (21) 村上泰樹・久保弘幸編『上板井遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告 第76冊 兵庫県教育委員会 1990年
- (22) 森下大輔編『家原・堂ノ元遺跡 ― 国道175号線社バイパス工事に伴う調査―』加東郡埋蔵文化財報告5 加東郡教育委員会 1984年
- (23) 森下大輔『下三草・諏訪ノ下遺跡 ― 町道藤田～下三草線および上福田地区県営圃場整備事業に係る調査―』加東郡埋蔵文化財報告12 加東郡教育委員会 1991年
- (24) 宮原文隆『貝野前遺跡』中町文化財報告10 中町教育委員会 1995年
- (25) 山下史朗編『大垣内遺跡 ― 加古川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県文化財調査報告第98冊 兵庫県教育委員会 1991年
- (26) 宮原文隆『思い出遺跡群Ⅰ ― 第1区～5区の文化財発掘調査―』中町文化財報告17 中町教育委員会 1998年
- (27) 宮原文隆『糺屋・土井の後遺跡Ⅰ ― ウェルマート建設に係る文化財発掘調査―』中町文化財報告14 中町教育委員会 1997年
- (28) 宮原文隆『森本・上島原遺跡 ― 中町南小学校屋内体育館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査―』中町文化財

報告3 中町教育委員会 1993年

- (29) 岸本一宏「淡路の弥生集落の動態(予察)」『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ— 禿山遺跡他—』兵庫県文化財調査報告第177冊 兵庫県教育委員会 1998年
- (30) 播磨北東部の集落位置の変遷についてはいずれ稿を改めて行いたい。
- (31) 例えば西脇市滝の上20号墳では図のような鼓形器台と壺形土器が出土している。古墳は一辺16mの方形で、土器は墳丘から出土している。土器の実測・掲載については西脇市教育委員会岸本一郎氏の御協力・御許可を頂いた。(『西脇市史』本編 西脇市役所 1983年)



第17図 西脇市滝ノ上20号墳
出土 山陰系土器

第3節 荒田神社裏遺跡の銅関連遺構について

今回の調査では銅関連の炉跡と鉾滓(カラミ) 17トンを検出した。この遺構について若干の考察を加えたい。

(1) 炉跡について

今回検出した炉は、タタキ面から検出した鉾滓の分析結果から、銅生産関係の炉であると考えている。この炉跡は、前述したように、粘土と石が入り被熱した表面と、その両側に粘土のタタキ面があるだけで、土坑状の掘り込みは確認できず、炉の形態については、全く不明である。また、炉を重層して構築したり、炉の周囲に溝や落ち込みを設けたりするなどの、明確な排水・防湿施設は認められない。

銅生産関連の炉については、神崎勝氏がまとめ、考察している⁽¹⁾。それによると、一般的に銅関連の炉としては、製錬炉と鑄造用の溶解炉があり、銅製錬の炉は基本的に吹床タイプの炉であることが知られている。中世段階においては、炉自体が、地表に半球状の土坑を掘り込んだものであり、近世段階以降の炉になると、炉の地下に大規模な防湿施設を構築するようになる。

一方、鑄造炉については、古代から中世のものは基本的に3～4部分からなる甑炉であり、地上もしくは地下に設けた基礎の上に自立する竪炉であることが明らかになってきている。

炉の基礎および構造については、いくつかの形態があるようだが、炉台を地中に埋めこむもの、炉と小型埴塼を併用するなど、地下施設型のものと、地表に礫・鑄型片・粘土塊などを敷き詰めて、炉台を作る地上施設型のものに大別できる。

荒田神社裏遺跡の炉跡は、検出状況から地上施設型と考えられ、形態から、地面に礫・鑄型片・粘土塊などを敷き詰めて、炉台を作る鑄造炉に類似している。

(2) 鉾滓(カラミ)について

今回の調査では鉾滓(カラミ)を計17トン検出している。最も大きなカラミは幅約50cm、34kgのもの(M12)である。

カラミにも大きく分けて二種類ある。塊状(M1～4・12・13)のものと円盤状(M5～11)のものである。塊状のものは、不整形で内部に気泡痕が多く残っており、今回の調査の中で最も多く出土している。

一方円盤状のカラミは、周辺が皿状に立ち上がっていて、素吹炉における水打ちによる冷却の結果と推定できる。いわゆる鉾^{かわ}と呼ばれる類に該当し、粗銅を取り出す前のカラミと考えられる。